

カキ養殖における食害対策

近年、魚類による食害で養殖カキの生産量が減少し、生産者は頭を悩ませています。食害痕(写真1)は従来から確認されていましたが、近年は特に目立つことから、令和6年4月下旬の本垂下時に、日生町漁協の協力を得て水中カメラ(タイムラプスカメラ、Brinno 社製 TLC200Pro)を設置し、その実態を調査しました。また、その効果についても調査を実施しました。

現在、一部の生産者は、食害を減らす目的で、カキ種苗(ホタテ貝殻に付着させたもの)を密集させて内側のカキを食害から守る「束ね垂下」を実施しています。

今回の撮影調査で、推定サイズ 35~40cm のクロダイや 12~15cm のクサフグがカキの稚貝をついばむ様子が確認されました(写真2)。

また、束ね垂下について、本垂下1週間後に食害状況を確認したところ、通常の垂下では3割が食害に遭いましたが、束ね垂下の中央付近では1.7割と通常垂下よりも食害の割合が低く、束ね垂下の効果が確認されました。

撮影調査で小型のクサフグが確認されたことから、カキ種苗どうしの間隔をクサフグが入り込めない程度まで狭める方法、例えば「4つ折り束ね垂下」のような方法も食害対策として効果的ではないかと考えています(写真3)。

今後も調査を継続し、より食害対策として効果的かつ効率的な垂下方法を確立することにより、カキ養殖の安定生産に寄与していければと考えています。

(海面・内水面増殖研究室：小見山)



写真1 食害に遭ったカキ種苗
(白い殻が食害痕)



写真2 撮影された魚
(左：クロダイ、右：クサフグ)

種苗ごうしの間隔が比較的狭い

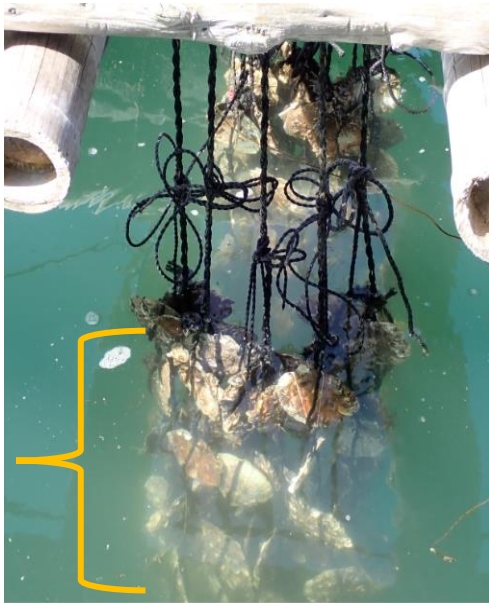


写真3 4つ折り束ね垂下
(1本のカキ種苗ロープを
4つ折りにして束ねている。)